

後期、気持ち新たに

岩本進 北海道新聞編集局 報道センター(医療担当)

後期が始まりました。

前期は修士課程に入学して、無我夢中で講義に耳を傾け、ゼミで議論し、書籍を読んで考え深めました。あつという間でした。

1回目、7限の講義は、ジャーナリズムというか、報道の役割や記者の矜持などを改めて確認する貴重な時間となりました。

誰も知らない事実、隠されている真実、これから起こり得ること。これらを掘り起こし伝えることが本質だ、と「7人プラス1人の医学ジャーナリスト」や「精神医療に取り組んだ9人のジャーナリスト」の話聞き、自分の中で再確認していました。

当時の医学界の常識をくつがえした『薬の効果・逆効果～臨床薬理学入門』『ただし治療あやしい治療～紅茶キノコからがんワクチンまで』で手がけた、小枝一夫さんは北海道新聞のう大先輩トシりました。

20数年前、私が毎月のようにデスク・部長の目をだまくらかして出張で上京し、プレス向けのセミナーなどを東京でも取材し始めたころ、いつもこうしたセミナーの最前列には、確か2人の殿方がいました。「医学ジャーナリスト協会の〇〇」と名乗り、必ず質問していましたことを思い出しました。

6限は、8月31日に開かれた「福祉と医療・現場と政策の新たなえにし結ぶ会」の反省会でした。

裏方のみなさんの苦勞がひしひしと伝わってきました。

「前日は2時間しか眠れなかった」「(当日は忙しくて)話は聞けなかった」など。本当にお疲れさまでした。